

「田中食堂の春」

朝比奈 波音

登場人物

田中ヤエ（76） 田中食堂の店主

チェ・ジス（21） 韓国人

○ 田中食堂・外観

東京の下町。古びた建物。入口には暖簾で『田中食堂』の文字。建物を覆うように舞う桜吹雪。入口の戸が開き、中から作業着姿の常連客たち、「ごちそうさん」と言いながら、爪楊枝を口にくわえて出てくる。

○ 同・店内

客の勘定をしている割烹着姿の田中ヤエ（76）。店の奥の席で、一人涙を流しながら菜の花のお浸しを食べるチエ・ジス（21）。

ヤエ「（笑顔で）ありがとうございますました」

ヤエ、ジス以外の最後の客を見送り、テキパキと後片付けを進める。箸を置き、立ち上がるジス。

ジス「あの、すみません！」

ヤエ「あいよ？」

ジス「あの……。ここで働かせてください!!」

ヤエ「へっ？」

動かしていた手が完全に止まり、キョトンとした顔でジスを見つめるヤエ。

○同・店の奥（夜）

腰を叩きジスの向かいの席に座るヤエ。

ヤエ「やれやれ。やっと終わった」

ヤエを真剣な目つきで見つめるジス。

ヤエ「あんた、名前は？」

ジス「私はチェ・ジスです。韓国から来ました」

ヤエ「韓国？ 何でまたそんな所から……。

まあいい。でも一体どうしてこの店で働き

たいんだい？」

ジス「ナムル、美味しかったです」

ヤエ「ナ、ナムル？ 何だい、ナムルって？」

ジス「お花のナムル……」

ヤエ「ああ。菜の花のお浸しのことかい。そ

うかい。気に入ってくれたのなら、それは

良かった」

ジス「お浸し、とても美味しく、私、泣きました。私、お浸しの作り方知りたいです」

ヤエ「はあ？ ダメダメ。ウチは人を雇う余裕はないんだ。とっとと帰ってくれ！」

とヤエ、シツシツと手でジスを追い払う。ジス、突然泣き出して。

ヤエ「何だい？ どうしたんだい？」

ジス「お願いです!! 私、日本に来たばかりです。友達もお金ありません。私、あなたの料理、もっと食べたいです。お願いします！」

頭を下げるジス。困惑するヤエ。

ヤエ「もう、しょうがないねえ……。暫くここに置いてやるよ」

ジス「ありがとうございます!!」

立ち上がり笑顔で頭を下げるジス。

ヤエ、苦笑いでジスを見つめる。

○同・外（朝）

エプロン姿のジス、暖簾を出して桜吹

雪を笑顔で見つめる。

○ 同・店内

メモ帳片手に、片言の日本語で必死に接客をするジス。客たち、ジスを気遣いゆつくりと話して注文。

不安げな顔のヤエ、ジスの様子を伺いながら店の奥を行ったり来たり。

○ 田中食堂・外観（朝）

蝉しぐれと共に軒先の風鈴が風に揺られてカラカラと音を立てる。入口から暖簾を持ったジスが出て来る。

○ 同・店内

作業着姿の常連客たちが入ってくる。

ジス「いらっしやいませ!!」

エプロン姿のジス、常連客の注文を手際よく取る。

ジス「サバ味噌定食2人前!」

ジス、慣れた日本語で次々と仕事をこなす。厨房から安堵した表情のヤエ、ジスの動きを見守る。

○同・厨房（夜）

菜箸で鍋の中のそうめんをかき回しているヤエ。ジスを手招きして。

ヤエ「ジス、こっちへおいで」

笑顔のジス、ヤエの隣へ寄って来て、鍋の中を覗き込む。

ヤエ「いいかい、ジス。今日はお前に田中食堂特製のそうめんの作り方を教えてやるから、よく覚えておくんだよ」

ジス「はい!!」

ヤエ「日本の夏はそうめんに限る。麺を茹でたらすぐに氷水で冷やす。それから、トマトやキュウリ、ミョウガに紫蘇」

ジス「わあ、美味しそうです!」

ヤエ「梅干を加えてやれば、暑くて食欲のない時でも、いっぱい食べられるんだよ」

ジス「へえ」

ジス、鍋の中を時折見つめ、しっかりとメモを取る。ヤエ、火を止めて。ヤエ「よし、できた。ジス、盛り付けするよ」

ジス「はい！早く食べたいです！」

お湯を茹でこぼす笑顔のヤエ。

その様子をじっと見つめる笑顔のジス。

### ○田中食堂・外観

建物に降り注ぐように落ちる枯葉。

入口からほうきとちりとりを持ったジ

ス、出て来て枯葉を掃除し始める。

### ○同・店内

ヤエから料理を受け取り、テーブルに運ぶジス。

ジス「お待たせしました！サバ味噌定食と

生姜焼き定食です」

と客に渡し、すぐに勘定待ちの客のいるレジへ向かう。ヤエ、少しやせ細り、



料理を運ぶ動きが鈍くなっている。

○同・厨房（夜）

サンマを2尾焼くヤエ。割烹着のポケットから1枚の写真を取り出す。そこに写っているのは、学生服を着たおさげ髪の女の子。

ヤエ「なあ、みどり。お前がもし、生きていたら……」

ジス「おばあちゃん！お手伝いします!!」

ヤエの後ろから駆け寄る笑顔のジス。

ヤエ、慌てて写真をポケットに戻して。

ヤエ「ありがとよ。今日はサンマの塩焼きだ。

ジス、その大根をおろし金ですりおろしておくれ」

ジス「はい！分かりました!!」

ヤエの後ろで鼻歌まじりに大根をすり

おろすジス。

ヤエ、そんなジスを愛おしく見つめる。

○田中食堂・外観（朝）

雪が降り、少々積もっている。入口に  
しめ飾りと『賀正』と書かれた張り紙。

○同・店内（朝）

テーブルの上には重箱に詰められたお  
せち料理と、餅の浮いたお雑煮が並ぶ。  
ヤエとジス、手を合わせて。

ヤエ・ジス「いただきます」

ヤエとジス、お雑煮を食べて。

ヤエ「美味しいかい？」

ジス「はい！　とっても美味しいです!!」

ヤエ「そうかい、そうかい」

微笑むヤエ、突然真顔になり箸を置く。

ヤエ「なあ、ジスや」

ジス「何ですか？」

ヤエ「お前がこの店に来て、もうすぐ1年だ」

ジス「はい!!」

ヤエ「いいかい？　ジス。店の前の桜の花が

満開になったら、私はお前に菜の花のお浸

しの作り方を教えてやる。そうしたらお前は  
この店を出て、国へ帰るんだ」

ジス「嫌です！　どうして突然そんなこと  
言いますか？」

ヤエ「この店を終わりにするんだよ」

ジス「終わり？　この店、なくなりますか？」

ヤエ「そうだ。私ももう歳だ。腰もだいたい弱  
くなったし、そろそろ閉め時だと思っ

ジス「そんなのダメです!!　私、このお店で  
もっと働きたいです！」

ヤエ「ダメだ！」

ジス「でも、まだ知らないことも……」

ヤエ「もう十分じゃろ？　頼むよジス。私を

孤独のオババに戻しておくれ……」

ジス「おばあちゃん……？」

ヤエ「亭主を亡くして、1年後には娘も死ん  
だ。それから私はどんなに寂しくても、ず  
っと一人で働いてきた」

ジス「……」

ヤエ「それがお前がこの店に来てからは、ま

るであの子が蘇ったようで……。なあ、ジスや。お前がここにいと、私はどうしても娘を思い出してしまい、辛くてたまらんのだよ……」

割烹着のポケットから1枚の写真を取り出し、泣きながら見つめるヤエ。

ジス「辛い思いをさせてごめんなさい……。でも私、おばあちゃんのこと家族だと思っ  
てます。だから、一人にはできません」

泣き崩れるヤエ。ジス、ヤエを後ろからそっと抱きしめる。

### ○田中食堂・外観

桜吹雪が店を覆うように舞っている。

### ○同・店内

ヤエ、ひとり菜の花のお浸しを盛り付ける。客たち、入口から威勢よく入ってくる。ジス、厨房から顔を出して。

ヤエ・ジス「（笑顔で）いらっしゃい!!」